

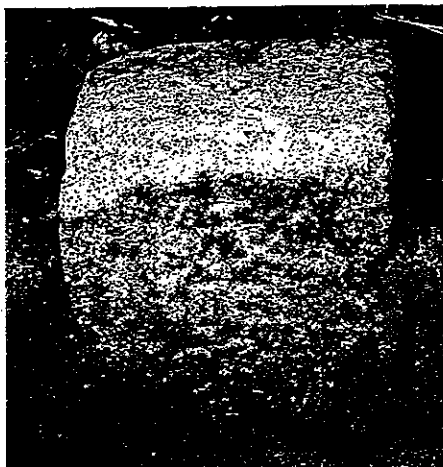
地下防空壕跡・「陸軍」境界石：

大学に残る戦争遺跡

5月から都立調布南高校(調布市多摩川6丁目)で始まる多摩の戦争遺跡をめぐる公開講座の中で、今年は「キャンパスの中の戦争遺跡」を取り上げる。成蹊大(武蔵野市)や東京学芸大(小金井市)を中心に今も残る地下防空壕跡や旧陸軍の境界石などを紹介。軍事施設と大学との意外な結びつきを浮き彫りにする。

来月から調布南高で公開講座

社会科学論の中田均さん「スライドでみる多摩の戦っている講座の一環。6回目(56)が2006年から、争遺跡」と題して毎年開く。の今年は、15年かけて断片



「陸軍」の文字が刻まれた境界石。東京学芸大近くにあり、旧陸軍技術研究所の敷地と民有地の境を示していた。小金井市貫井北町



成蹊大キャンパスに残る地下防空壕跡の通気孔。武蔵野市吉祥寺北町3丁目、いずれも中田均さん提供

的に集めてきた約10大学のキャンパス内外に残る戦争遺跡をまとめた。

大学になぜ戦争遺跡が多いのか？ 中田さんによると、広いキャンパスを必要とした大学は、広大な敷地があった軍事施設を利用したケースが多いという。

例えば、学芸大は戦後、旧陸軍技術研究所跡地に建てられ、研究所の主な建物が教室として使われた。三鷹市の国際基督教大学(ICU)のキャンパスと本館も、中島飛行機三鷹研究所の広大な敷地と建物を活用して開校している。

一方、成蹊大は戦前、軍部に接収されて屋内運動場が三菱電機成蹊工場となり、勤労働員された学生たちがレシーバーの組み立て作業に汗を流した。また、戦争末期、軍部が大学と賃貸契約を結んで校舎に陸軍の部隊を駐屯させた国立市の旧東京商科大(現一橋大)のような例もある。

講座では、成蹊大キャンパスに今も残る地下防空壕跡の通気孔や学芸大の地下

道の通気孔、学芸大近くの道路脇に「陸軍」の文字が刻まれた境界石、中島飛行機武蔵製作所の疎開工場があった一橋大の兼松講堂など約100枚のスライドを逸話を交えて上映する。

中田さんは「キャンパスで取り壊された戦争遺跡は少なくないが、断片的でも周辺の遺跡も含めて戦争の傷痕を後世に証言してくれる」と話している。

講座はスライドで解説。5月7、14、6月4、18日(浅川地下工場跡の現地見学)で、キャンパスの遺跡の報告は最終回の6月25日(各回午後1時〜4時)。受講料1600円(保険料込み)。定員30人。往復はがきで〒182-0025 調布市多摩川6の2の1 調布南高校公開講座係(042-483-076)へ。22日必着。(佐藤清孝)